

国立歴史民俗博物館の愉悦④

江戸名所模様下着



国立歴史民俗博物館が所蔵する「江戸名所模様下着」は男性用の下着（小袖と襦袢の間に着る衣服、間着ともいう）であるが、類例を見ない唯一無二の作例である。モチーフの中心となっているのは、背面の裾から正面の裾にかけて描かれた日本橋である。それに加え、背面には浅草寺・猿蓑町・隅田川・今戸・有馬屋敷・吉原などを、正面には越後屋・不忍池・寛永寺・江戸城・富士山などをあらわしている。

歌枕や八景といった文芸と結びついた名所を模様とした小袖はよくあるが、それ以外の名所を取り上げたものは、極めて珍しい。それら数少ない作例も、墨描きの描絵、もしくは、絵画的な表現が可能な友禅染によっており、本品のように刺繍のみで表現した作例は他にない。

唯一無二だけに、本品には謎が多い。第一の謎は、制作年代である。濃淡の茶色や青色の多用は、幕末期の錦絵の風景画に通ずる色彩感覚を示し、それを大いに意識しているよう。したがって、十九世紀以降の作であることは間違いないが、問題は生地の木綿である。この木綿は、経糸に右上がりの撚（Z撚）が、緯糸に左上がりの撚（S撚）がかかった糸を使っている。例外もあり絶対的な区別にはならないが、手つむぎやガラ紡績の場合はS撚、西洋式の機械紡績であればZ撚となる傾向を示す。そして、経糸に西洋式の機械紡績の糸を、緯糸に手つむぎやガラ紡績の糸を用いた木綿布は半紡と呼ばれ、一八八四（明治十七）年から一八八七（明治二十）年頃に多く生産されたと言われている。従来、本品は江戸時代後期の作とされてきたが、制作年代が明治時代に下がる可能性は排除できない。

第二の謎は、落款があることである。篆書体のその文字は「縫木」と読める。縫という字がつくことからして、刺繍をした職人のものであろう。近世以前において、社寺や祭礼への奉納品を除き、染織の職人が自身の落款を入れることはなかった。職人はあくまで職人に過ぎず、作家意識をもって落款を入れるようになるのは、近代以降となる。この点も、本品の制作年代を江戸時代後期とすることを躊躇させる。

一八七三（明治六）年のウイーン万国博覧会への出品を機に、西洋におけるジャポニスムの中で、日本の刺繍は注目を集め、有力な輸出品となった。はじめに花鳥、一八八〇年代の終わり頃より写実的な風景、一九〇〇年代に入ると写実的な動物が人気のモチーフとなった。本品は、花鳥から写実的な風景へと人気が移る過渡期の作で、やはり西洋人に人気のあった江戸時代の錦絵を意識して、西洋人向けに制作したものである可能性を考えなければならぬ。